

吹奏楽部 18 期の湯浅と申します。クラリネットを担当していました。

ここでは、幹部学年として過ごした 2005 年度の吹奏楽部について、個人的な主観で振り返らせていただきます。時が経ち、思い出が美化されている部分もあるかもしれません、ご容赦ください。

### 【コンクール】

中学生の頃、コンクールといえば、「練習が辛い」「カットばかりで吹くところがない」「ピッチが合わなくて気まずい」「早く終わってほしい」といったネガティブな印象しかありませんでした。しかし、中 3 と高 1 の年に府大会出場を逃した時には、それはそれで悔しくて、気づけば自分が高 2 の時には「また府大会に行きたい！」と意気込んでおりました。

当時の自由曲は『バレエ音楽「中国の不思議な役人」』、課題曲は『マーチ「春風」』でした。『中国の不思議な役人』なんて、今聴いても複雑で難しい曲だと思います。当時も曲の理解は全然できていなかったと思うのですが、それでも手探りで、ただがむしやらに練習するしかありませんでした。

そして「ギリギリまで練習しまくったから大丈夫」という自負だけで挑んだ地区大会本番。結果、府大会進出が決まり、嬉し泣きしたことを今でも覚えています。

なお、コンクールの成績だけ見れば、当然、他校にはもっと上手な演奏をする学校があった訳ですが、それでも当時の私たちは、高槻中高の演奏にプライドを持ってやっておりました。その根底には、当部のモットーである「人に感動してもらえる音楽を」があったのではないかでしょうか。演奏技術は未熟でも、一人ひとりが気持ちを込めて演奏することに努めていたように思います。よく他校の上手な演奏を「ロボットみたい」とケチつけたりしていた気がするのですが、それもそのプライドゆえの強がりだったように思います。

### 【カジュコン】

吹奏楽部の一年の中でも特に盛り上がるイベントが、カジュコン。なかでも、自分たちが幹部学年として企画に携わった最後のカジュコンは、今でも忘れられない思い出です。

特に鮮明に覚えているのは、第 2 部の「劇」です。2002 年度頃から「カジュコンの 2 部は劇」というトレンドが始まり、2005 年度の我々の代では、当時流行っていたドラマ「電車男」のパロディに挑戦しました。ストーリーは、主人公のオタクと、美人なヒロイン(女装)が、その頃話題だったキャラクター(アザラシのタマちゃん、レッサー・パンダの風太くん、修二と彰、スター・ワーズの監督など)とすたもんだりながらも、最終的には結ばれる、というなんとも破茶滅茶な内容でした。

「ヒロインがナイスバディすぎる！」「彰の滑舌が悪すぎる！」だと、「クワウチに大道具の材料を買いに行こ！」「ジャンカラで劇中の歌の特訓するで！」だと。皆で気ままにあーだこーだ言いながら準備を進めていた時間が、本当に楽しかったです。

そして本番当日。現代劇場の舞台でいつしょ前にスポットライトを浴びちゃったりしながら劇を披露したことや、ナレーションの永田先生がカミカミだったこと、自分達の考えたシナリオで

客席から笑い声が聞こえてきたことなど、一つ一つが新鮮で、とてもワクワクしたひとときでした。

そういうえば、最近こっそりカジュコンを見に行きました。現代劇場大ホールは取り壊され、今は、高槻城公園芸術文化劇場？という新しいホールに変わっていました。そのときの劇は「アナと雪の女王」だったのですが、そのクオリティの高さにとても感動しました（もちろん演奏も）。男子校時代とベクトルは多少違うかもしれません、今でも母校の吹奏楽部が舞台で活き活きと輝いているのを観て、とても誇らしく思いました。

#### 【全体を振り返って】

私は、中1の4月から高2の3月まで、この吹奏楽部に在籍していた訳ですが、日々を振り返ると、そこにはあらゆる青春が詰まっていました。

先輩たちの人柄や演奏技術に憧れたこと。その先輩たちが引退していくこと。自分が先輩になったこと。他校の女子部員の方に恋焦がれたこと。コンクールやアンサンブルコンテストで喜びや悔しさを分かち合ったこと。同級生や後輩達と最後のカジュコンをやり遂げたこと。とてもベタではありますが、どれもかけがえのない思い出です。

そして、この5年間の吹奏楽部生活を温かく見守り、導いてくださった武部先生には、感謝とリスペクトしかありません。時に厳しく、時にゆるい先生の人柄が、当時の高槻中高吹奏楽部らしさでもあったよう思うのですが、僕はそれがとても心地良くて大好きでした。

かけがえのない5年間を、本当にありがとうございました。